

江戸三大水害における江戸の被害と 救済に関する考察

東京理科大学工学部第二部建築学科

辻本研究室

納富 壮一郎

目次

第1章. 序説	
1-1. 研究背景と目的	1
1-2. 研究方法	2
1-3. 研究対象	3
1-4. 洪水、氾濫、水害の定義	4
1-5. 外水氾濫・内水氾濫	6
1-6. 山水・地水	7
1-7. 江戸時代の水害	8
第2章. 三大水害の内容	
2-1. 三大水害概要	13
2-2. 寛保の水害	13
2-3. 天明の水害	18
2-4. 弘化の水害	20
第3章. 江戸三大水害による江戸の被害	
3-1. 江戸の被災地域	26
第4章. 水害の救済活動について	
4-1. 水害の救済活動	28
4-2. 救助船の活動	28
4-3. カスリーン台風	30
第5章. まとめ	31
付録	32

第1章. 序説

1-1. 研究背景と目的

江戸時代の災害と言えば、『火事と喧嘩は江戸の華』という言葉が現代にも残っているように大規模な火災が考えられる。しかし、地震や水害などの災害も数多く起こっている事が考えられる。そこで本研究では江戸の水害について研究・分析をしている。

気象災害の歴史を扱った文献・気象災害において長い江戸の歴史の中でも被害が非常に大きかったとされる三つの水害の内容が記述されているのを確認し、それらは江戸の三大水害と呼ばれている。寛保2年、天明6年、弘化3年の各々の年に発生している水害が江戸の三大水害と呼ばれ、それぞれに関連する文献の少なさから、本論では研究の対象を江戸の三大水害とし、被害状況、原因、救済活動などについて研究していくことを目的とする。

1-2. 研究方法

(a) 参考文献

- ・ 畠山久高 気象災害 土木学会 共立出版 1966年
- ・ 水利科学研究所 水利科学 第34巻 第192—197号 土木学会 1990年
- ・ 東京市 東京市史稿 変災篇2・3 1917年 (以下文献1とする。)
- ・ 東京市 東京市史稿 救済篇1・2・4 1922年 (以下文献2とする。)

以上の文献、特に東京の風水害の歴史についてまとめた文献1・2を用いて、三大水害、それぞれの概要、被害状況、天候などについてまとめ、救済活動の記録などの分析を行う。なお文献・気象災害における気象災害年表を付録として載せておく。

(b) 参考文献調査

文献1では災害の記録が様々な文献や報告書による寄せ集めになっており、出典先がそれぞれ異なっている。文献調査として、それぞれの文献に関する情報を整理しておく。

表1 文献調査

文献名	説明
翁草	江戸後期の随筆集。神沢杜口著。内容は歴史、地理、文学など。
出水一件	町奉行への災害の報告書。
後見草	杉田玄白による随筆集。
靈憲候簿	天文学者・渋川景佑による観測の記録。
續日本王代一覽	日本史(時代史、地方史)
曲亭雜記	滝沢馬琴による小説集。
見聞雜録	歴史書。

表1以外にも文献1内には人名等も出てくるが、それは名主の名前であり、報告書の一部として扱う。また、本所見廻りなどの奉行所名も記録に残されている。

(c) 水害被害地域の地図作成

地図ソフト (MapInfoProfessional8.5) を用いて、三大水害によって浸水被害にあった地域を古地図に落とし込み可視化する。古地図は図1の「明治12年東京全図」を扱う。



図1 明治12年東京全図

1-3. 研究の対象

(a) 対象地域

対象とする水害は文献・気象災害において江戸の三大水害とされている、寛保2年、天明6年、弘化3年の三つの水害とする。対象地域は文献1・2に記載されている地域なので、旧東京市15区（現在の千代田区、中央区、港区、新宿区の一部、文京区、台東区、隅田区の一部、江東区の一部）となる。

(b) 対象期間

対象の期間は江戸幕府が開府した1603年3月24日から幕府が滅びる1868年5月3日までの約265年間とする。

1-4. 洪水、氾濫、水害の定義

・洪水



洪水とは雨や雪解けによって、川の水の量が普段より著しく増えた状態のことを言う。

河原は広い敷地の割には細い川が多いが、川幅いっぱいになり、水が押し寄せてしまうと、広い河原も水の下に隠れてしまう。このように水が異常に増えた状態のことを『洪水』という。

・氾濫



氾濫とは、雨などによって、町や農地などに水が溢れてしまうことであり、その種類によって『外水氾濫』と『内水氾濫』とに区別されている。

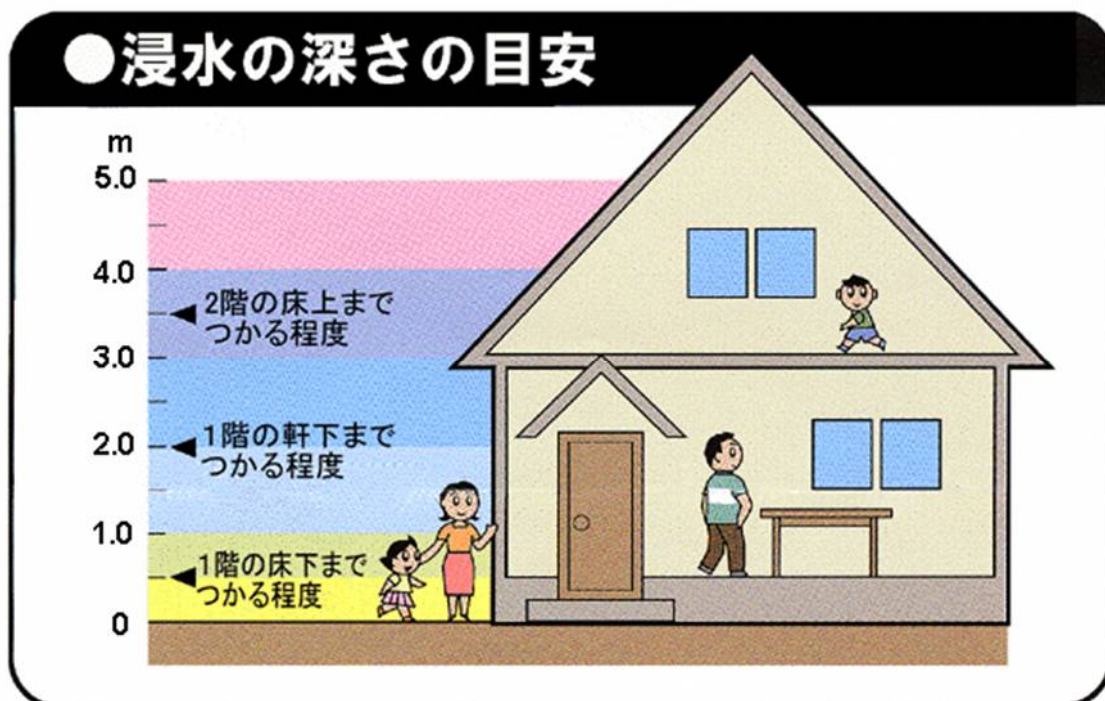
・水害



水害とは、水によって引き起こされる災害のことで、『外水氾濫』も『内水氾濫』も水害と呼ばれている。

ただし、海水による水害の場合は、『高潮災害』、『津波災害』といった呼び方をされている。

・ 浸水深さの目安



参考・引用元 北海道紋別市 HP

URL : <http://mombetsu.jp/emergency/bousai/kouzuihanran.html>

洪水、氾濫、水害の定義はこのようになり、江戸三大水害では0.3mから5mを越える浸水被害が記録されている。現代の二階建ての一軒家などは、ほぼ水に飲み込まれてしまう状況となるので、非常に大きな水害であったことが分かる。

1-5. 外水氾濫・内水氾濫

・外水氾濫

外水氾濫とは、河川そのものの水位が上昇して起こる水害のことで、大量の水が早い速度で一気に市街地へと流れ込み、わずかな時間で住宅などの浸水や人的被害が起こる。また、流れ込んでくる水は泥水であり、洪水がおさまった後も土砂や汚泥が堆積するため、復旧が難しいとされている。

・内水氾濫

内水とは市街地へ降った雨のことであり、その雨水の量が処理能力を超えると内水氾濫が発生する。通常なら内水は下水道の雨水管やポンプ施設によって河川へと排水されるが、施設の能力が雨量に追いつかなかつたり、外水の水位が上昇して排水できなかつたりすると、内水の水はけが悪くなり、建物や土地、道路などが水に浸かってしまう。とくに、最近ではゲリラ豪雨のような局地的な豪雨が頻発し、内水氾濫による被害が増えている。

三大水害は全て、河川の堤防の決壊が早い段階で起こっているため、外水氾濫がまず発生し、その後、浸水被害が多々発生していることから内水氾濫が発生したと考えられる。文献1・2には外水氾濫、内水氾濫という表記はなく、類似語で山水・地水という表現が用いられている。

1-6. 山水・地水

水害の種類には、外水氾濫・内水氾濫のように氾濫の仕方によって区別するという方法も用いられているが、文献 1 には頻繁に山水と地水という言葉も出てくる。外水氾濫・内水氾濫では主に氾濫の仕方による区別であるが、山水・地水とは主に出水する地区（川）によってその呼び名が変わるというものである。これは出水場所の特定、その川が氾濫しているか、していないかの判断が一言でできるものとなっている。

・ 山水

山水とは荒川の上流の地区に多量の雨が降ってしまって出水してしまった場合か利根川上流の地区に多量の雨が降ってしまった場合とに分けられている。

・ 地水

地水は直接的に東京に多量の雨が降ってしまった場合に起こり、地水の災害の多くは、神田川上流、赤羽川上流、忍川上流、桜川上流の各溪谷などにおいて出水することによって起こる。

本論 1-7 の江戸時代の水害についての一覧表では山水・地水についての表記が書かれており、水害を見ていく上で一つの情報となっている。

なお一覧表によると、寛保の水害は山水と地水、天明の水害も山水・地水、弘化の水害は山水のみが原因の水害となっている。

1-7. 江戸時代の水害

(a) 江戸府内の災害一覧

表2は文献1を参考に作成した江戸時代の江戸府内における災害の一覧となっている。災が「水」と表記されるものを水害とすると、全部で56件の水害が発生している。なお、三大水害は黄色に色を変更している。

表2 文献1による江戸の災害一覧

年月日			新暦		災	原因	摘要
年号	年	月/日	年	月/日			
天生	18	8月3日	1590	9月1日	水	大雨	地水・山水
天生	18	10月16日	1590	11月13日	水	大雨	地水
文禄	3	9月9日	1594	10月22日	風	暴風雨	
慶長	元	6月19-22日	1596	7月14-17日	水(大)	大雨	山水
慶長	3	3月	1599	4月	風	大風	破屋
慶長	11	5月25日	1606	6月30日	風	暴風雨	難船
慶長	12	3月9日	1607	4月5日	風	暴風雨	
慶長	17	7月29日	1611	9月4日	風	暴風雨	
慶長	19	8月28日	1614	10月1日	風(大)	暴風雨	
元和	3	2月13日	1617	3月20日	風	大風	
元和	3	4月10-12日	1617	5月14-16日	風(大)	暴風雨	山水
元和	7	3月7日	1621	4月28日	風	風雨雷	難船
元和	7	8月3日	1621	9月18日	風	大風	
寛永	10	6月12日	1633	7月17日	水	霧雨	山水・地水
寛永	13	1月21日	1636	2月27日	水	風雨	
寛永	14	8月7日	1637	9月25日	水	暴風雨	山水・地水
寛永	15	1月1日	1638	2月14日	風(大)	大風雨	
正保	元	8月4日	1644	9月4日	水	連日大雨	山水
正保	2	6月27日	1645	8月18日	雷	風雨雷	
慶安	元	7月13日	1648	8月31日	風	暴風雨	
慶安	3	5月10日	1650	6月8日	雷	雷雨	
承慶	元	8月29日	1652	10月1日	風	暴風雨	
承慶	2	5月21-22日	1653	6月16-17日	水	大雨	
明暦	元	8月8日	1655	9月7日	風	暴風雨	
明暦	2	8月22日	1656	10月9日	風(大)	暴風雨	倒屋
明暦	3	1月20-27日	1657	3月4-11日	雪	大雪	
萬治	2	7月2日	1659	8月19日	水	暴風雨	
萬治	3	7月20日	1660	8月25日	風	風雨連日	
萬治	3	8月20日	1660	9月24日	風	暴風雨	
萬治	3	9月20日	1660	10月24日	風	暴風雨	難船
寛文	5	6月2日	1665	7月14日	雷	雷雨	
寛文	5	8月29日	1665	10月7日	風	暴風雨	
寛文	6	5月3日	1666	6月5日	水	暴風雨	
寛文	6	9月	1666	10月	水	暴風雨	地水
寛文	10	6月3日	1670	7月19日	風	暴風雨	
寛文	11	8月28日	1671	9月30日	水	暴風雨	山水
寛文	12	5月5日	1672	5月31日	水	暴風雨	山水
延宝	元	8月9日	1673	9月19日	風	暴風雨	
延宝	4	8月12日	1676	9月19日	風	暴風雨	
延宝	5	8月6日	1677	9月2日	風	暴風雨	
延宝	8	閏8月6日	1680	9月28日	風(大)	暴風雨	山水

年号	年月日		新曆		災	原因	摘要
	年	月/日	年	月/日			
天和	2	7月2日	1682	8月4日	雷	雷雨	
貞享	元	9月	1684	10月	風	暴風雨	
貞享	4	9月9日	1687	10月14日	風	暴風雨	
元禄	7	8月8日	1694	9月26日	水		山水
元禄	9	9月9日	1696	10月4日	風	暴風雨	
元禄	14	8月17日	1701	9月19日	風	暴風雨	
元禄	15	10月2日	1702	11月20日	風	暴風雨	
宝永	元	7月5日	1704	8月5日	水	大雨数回	山水
宝永	3	7月27日	1706	9月3日	風	暴風雨	
宝永	4	8月19日	1707	9月14日	風	暴風雨	
宝永	4	9月12日	1707	10月7日	風	暴風雨	
正徳	元	8月24日	1711	10月6日	風	暴風雨	
享保	2	8月16日	1717	9月20日	風(大)	暴風雨	
享保	5	8月19日	1720	9月21日	風	暴風雨	
享保	6	閏7月	1721	8月	水	暴風雨	山水
享保	8	8月9日	1723	9月8日	水	暴風雨	地水・山水
享保	12	6月6日	1727	7月24日	雷	雷雨	
享保	12	7月20日	1727	9月5日	水	連日雨	山水
享保	13	9月2日	1728	10月4日	水(大)	大雨数回	山水・地水
享保	15	8月31日	1730	10月12日	風	暴風雨	
享保	16	8月27日	1731	9月27日	風	暴風雨	山水
享保	18	8月19日	1733	9月26日	風	暴風雨	
享保	19	6月17日	1734	7月17日	水	大雨	山水
享保	19	8月	1734	9月	水		山水
享保	20	7月3日	1735	8月20日	風	旋風	
元文	元	8月18日	1736	9月22日	風	暴風雨	
元文	2	4月25日	1737	5月24日	風	旋風	
元文	3	7月23日	1738	9月6日	風	暴風雨	
寛保	2	8月1-8日	1742	8月30-6日	水(大)	連日風雨	山水・地水
延享	元	1月8日	1744	2月21日		旋風	
延享	2	9月14日	1745	10月9日	風	大風	
延享	3	7月13日	1746	8月29日	雷	風雨雷	
寛延	元	8月8日	1748	8月31日	風	暴風雨	
寛延	2	8月13日	1749	9月24日	水(大)	連日雨	地水
寛延	3	4月23日	1750	5月28日	風	風雨雷	
宝曆	3	3月5日	1753	4月8日	風	大風	
宝曆	3	12月18日	1754	1月11日	風	風雪	
明和	2	8月2日	1765	9月16日	風	暴風雨	
明和	3	6月28日	1766	8月3日	水	連日大雨	山水
明和	3	7月20日	1766	8月25日	水	大雨	地水・山水
明和	5	6月16日	1768	7月29日	雷	風雨雷	
明和	6	8月26日	1769	9月25日	風	暴風雨	

年月日			新曆		災	原因	摘要
年号	年	月/日	年	月/日			
明和	8	10月6日	1771	11月12日	風	暴風雨	破船
明和	9	8月2日	1772	8月30日	風	暴風雨	山水
明和	9	9月17日	1772	10月13日	風	暴風雨	山水
安永	3	6月23日	1774	7月31日	風	暴風雨	
安永	8	8月25日	1779	10月4日	水	暴風雨	地水
安永	9	6月29日	1780	7月30日	水(大)	連日大雨	山水
天明	元	7月14日	1781	9月2日	水	暴風雨	山水
天明	2	7月18日	1782	8月26日	風	暴風雨	
天明	2	8月21日	1782	9月27日	風	暴風雨	
天明	2	9月567日	1782	10月11-13日	水	大雨三日	山水
天明	3	6月19日	1783	7月18日	水	連日大雨	地水・山水
天明	6	7月18日	1786	8月11日	水(大)	連日大雨	地水・山水
寛政	2	8月20日	1790	9月28日	風	暴風雨	
寛政	3	8月6日	1791	9月3日		暴風雨	
寛政	3	8月20日	1791	9月17日	風	暴風雨	
寛政	3	9月4日	1791	10月1日	海嘯(大)	暴風雨	山水・海潮
寛政	6	7月12日	1794	8月7日	風	旋風	
寛政	9	閏7月12日	1797	9月2日	風	暴風雨	
寛政	10	9月24日	1798	11月2日	雷	雷雨	
享和	2	7月4日	1802	8月1日	水(大)	連日大雨	山水
文化	5	7月25日	1808	9月15日	風	暴風雨	
文化	6	8月23日	1809	10月2日	風	暴風雨	山水
文化	7	7月16日	1810	8月15日	水	暴風雨	山水
文化	7	11月14日	1810	12月10日	風	暴風雨	
文化	9	7月1日	1812	8月7日	水	数日大雨	山水
文化	9	7月9日	1812	8月15日	風	暴風雨	
文化	11	1月11日	1814	3月2日	風	大風	
文化	13	閏8月3日	1816	9月24日	風(大)	暴風雨	山水
文化	14	7月20日	1817	9月1日	風	暴風雨	
文政	3	9月8日	1820	10月14日	風	暴風雨	
文政	3	10月16日	1820	11月21日	風	大風	破船
文政	5	6月12日	1822	7月24日	水	暴風雨	地水
文政	5	8月22日	1822	10月6日	風	暴風雨	山水・海潮
文政	6	8月17日	1823	9月21日	風(大)	暴風雨	
文政	7	8月15日	1824	9月7日	水	暴風雨	山水
文政	7	閏8月15日	1824	10月7日	水	大雨	山水
文政	11	7月2日	1828	8月12日	水	大雨	地水
文政	12	8月2日	1829	8月30日	水	大雨	地水・山水
文政	13	閏3月29日	1830	5月21日	雹	降雹	
天保	2	7月16日	1831	8月23日	水	大雨	山水
天保	4	8月1日	1833	9月14日	風	暴風雨	
天保	6	7月1日	1835	7月26日	水	暴風雨	山水

年号	年月日		新曆		災	原因	摘要
	年	月/日	年	月/日			
天保	7	7月9日	1836	8月20日	水	暴風雨	山水
天保	7	7月18日	1836	8月29日	風	暴風雨	山水・海潮
天保	7	8月1日	1836	9月11日	風	暴風雨	山水
天保	7	8月19日	1836	9月29日	水		山水
天保	8	8月14日	1837	9月13日	風	暴風雨	
天保	8	9月12日	1837	10月11日	水	連日雨	山水
天保	9	6月16日	1838	8月5日	水	霧雨	山水
天保	9	10月16日	1838	12月2日	風	大風	
天保	11	6月25日	1840	7月23日	水	暴風雨	山水
天保	11	7月15日	1840	8月12日	水	連日大雨	山水
天保	11	9月10日	1840	10月5日	水	暴風雨	山水
天保	14	閏9月2日	1843	10月24日	風	暴風雨	山水
天保	15	8月7日	1844	9月18日	水	連日雨	山水
弘化	2	7月28日	1845	8月30日	水	暴風雨	山水・地水
弘化	2	8月28日	1845	9月29日	水	暴風雨	山水
弘化	3	6月28-7日	1846	8月19-28日	水(大)	連日大雨	山水
嘉永	2	5月19日	1849	7月8日	風	暴風雨	
嘉永	3	7月	1850	8月	水(雨)	霧雨	
嘉永	3	8月8日	1850	9月13日	雷	雷雨	
嘉永	4	10月2日	1851	10月26日	風	暴風雨	
嘉永	5	8月10日	1852	9月23日	風	暴風雨	
嘉永	5	8月22日	1852	10月5日	風	暴風雨	
嘉永	7	5月12日	1854	6月7日	雷	雷雨	
安政	2	7月27日	1855	9月8日	風	暴風雨	
安政	3	8月25日	1856	9月23日	風(大)	暴風雨	山水・海潮
安政	4	閏5月28日	1857	7月19日	風	暴風雨	
安政	4	7月22日	1857	9月10日	風	暴風雨	地水
安政	4	11月25日	1858	1月9日	風	暴風雨	
安政	6	7月25日	1859	8月23日	風	暴風雨	山水・海潮
安政	6	8月12-13日	1859	9月8日	風	暴風雨	
万延	元	5月11日	1860	6月29日	風	暴風雨	山水
万延	元	6月10日	1860	7月27日	風	暴風雨	
万延	元	7月24日	1860	9月9日	風	暴風雨	
文久	元	10月5日	1861	11月7日	風	暴風雨	
文久	3	9月	1863	10月	水(雨)	暴風雨	
元治	元	8月9日	1864	9月4日	風	暴風雨	
元治	元	8月20日	1864	9月20日	水	大雨	地水
慶應	元	6月15-16日	1865	8月6-7日	風	暴風雨	山水・海潮
慶應	2	8月6日	1866	9月14日	風	暴風雨	山水
慶應	4	5月8日	1868	6月27日	水	暴風雨	地水・山水

(b) 江戸時代の全国における水害

図2は文献1(変災篇3)を参考にし、江戸時代の全国の水害の件数を10年毎に区切って、棒グラフにしたもので、色の異なる部分は、三大水害の発生年が含まれる期間である。これを見ると、江戸時代の間には181件の水害が発生していることが分かる。多い期間では10年で17件の水害に見舞われ、被害も大きかったと考えられる。

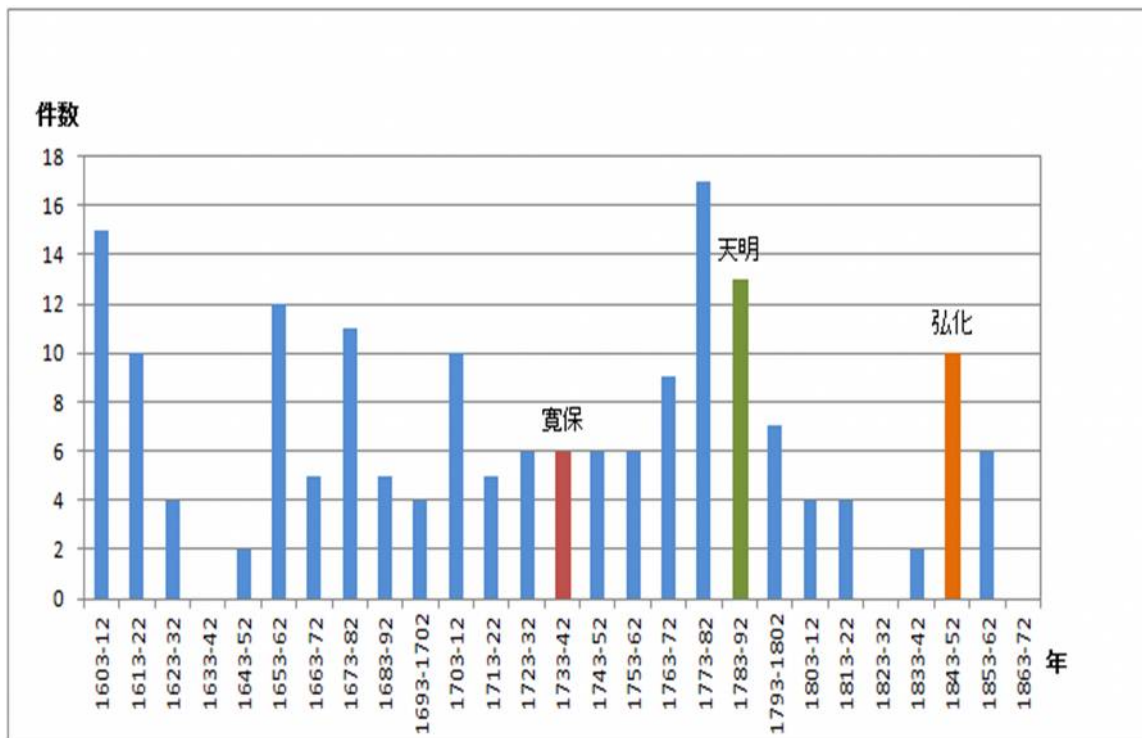


図2 10年毎の江戸時代の洪水件数

江戸時代全体で181件、江戸府内のみで56件の水害が発生しており、被害の大きさは大小あるが、江戸が265年間の中に如何に水害によって被害を受けていたかが分かる。

第2章. 三大水害の内容

2-1. 三大水害概要

表3は三大水害の概要を、被災地域全体と江戸府内でまとめたものである。寛保、天明の水害では全国で死者が1万人以上にも及び、特に天明の水害では約3万人もの人間が亡くなったとされている。弘化の水害に関しては、死者数の記録はなく、他の水害と比較しても被害地域は狭いものとなっている。

表3 三大水害概要

	発生年月日		死者(名)	罹災者(名)	被害地域・被害状況	原因
寛保2年	1742年8月28日～9月6日	江戸府内	6864	—	利根川・隅田川など大洪水により破堤。	山水・地水
		全国	6000～14000	—	福島・茨城・栃木・群馬・埼玉・東京・神奈川・新潟・富山・石川・福井・山梨・長野・滋賀・京都・奈良	
天明6年	1786年8月5日～8月11日	江戸府内	—	5323	関東一円大洪水、利根川・荒川・多摩川などのほか中小河川皆洪水。	山水・地水
		全国	30000	—	宮城・福島・茨城・群馬・埼玉・千葉・東京・神奈川・新潟・山梨・長野・岐阜・三重	
弘化3年	1846年7月23日～8月30日	江戸府内	—	2929	浅草において1.35mの浸水被害あり。	山水
		全国	—	—	福島・茨城・栃木・群馬・埼玉・千葉・東京	

2-2. 寛保の水害

(a) 寛保の水害内容(被災地全体)

寛保2年の水害の原因は大型台風の上陸によるものとされており、関東地方の被害地域はまことに広範囲にわたっている。被害の地域は西は府中・八王子から北方の熊谷・本庄・新町・倉賀野・高崎など、利根川の沿岸では群馬県内まで入っており、東京都内の千住から利根川沿岸の栗橋までの約40キロの区間で床上浸水しなかった家がなかったとされているほか利根川より東方の下総・常陸の平野部では、一面が浸水しまるで海のようになっていたようである。河川別に見ても荒川・神流川・碓氷川、烏川という荒川と利根川の三支川が異常出水したのであるから、利根川本川も同様のこととなって、これらの河川の下流の平野部では一面海のようになってしまったのもやむをえないことである。同時に上記河川と浅間山地をへだてて背中合わせに位置する千曲川流域にも異常な豪雨が発生しているようで、関東地方に劣らない大災害となっている。さらに南西の笛吹川流域でも千曲川流域ほどではないにしても、被害が出ている。

この大型台風による水位の上昇も異常なもので、荒川流域では最大 60 尺の上昇、さらに下流地域では 7,8 尺から 2 丈にわたる増水となったのである。こうした出水は当然、豪雨のピークが過ぎたあとも水位の上昇を引き起こしたとされている。このことは江戸でも 8 月の 4 日 5 日が水位の絶頂であったことで示されている。

そのほかには、台風は大阪湾に上陸して淀川地域にも大きな被害を与え、その後京都府、滋賀県から北陸の県を経て、新潟県まで被害が出ていることから台風は日本海寄りに通過したことが考えられる。

この大型台風で死者が発生しているのは、長野・山梨・東京・茨城・神奈川・群馬・埼玉の 7 県であったとされている。以上のことから江戸の三大水害の中でも最悪な結果となってしまった水害とされている。

(b) 寛保の水害内容(江戸府内)

8 月 1 日(新暦:1742 年 8 月 30 日)午後 7 時から 9 時頃、江戸をはじめとして関東を大雨が襲った。墨田川その他も出水し、家屋が強風で破壊され、築地、品川に停泊していた船なども破壊され、流されていった。

8 月 2 日(新暦:1742 年 8 月 31 日)午前 0 時の夜より 3 日(新暦:1742 年 9 月 1 日)午前 2 時に及び、利根川上流の水が溢れ出し、両国橋、新大橋、永代橋が破壊され、3 日午前 2 時の夜には、白鬚神社(墨田区)南方の南葛飾郡寺島村(現在の墨田区西部)の堤防が決壊し、葛西領小屋野(江戸川区)及び、綾瀬、千住の堤防が決壊してしまったことで、大洪水が小菅村(葛飾区)より本所付近(墨田区南部)にかけて侵入していった。

8 月 4 日(新暦:1742 年 9 月 2 日)午前 4 時から 5 日(新暦:1742 年 9 月 3 日)午前 6 時がこの大洪水の絶頂で本所及び深川が大きな被害を受けた。亀戸(江東区)その他の村も被害はかなり大きなもので、多くの溺死者を出してしまい、浅草(台東区)、下谷(台東区西部)もまた、多少の被害を受けたとされる。

8 月 8 日(新暦:1742 年 9 月 6 日)午前 11 時から午後 1 時頃に再び猛烈な雨が関東を襲い、本所、深川の水量を増していっただけでなく、神田川が氾濫してしまった。その結果、目白駒井町(文京区)の埋樋(水門)が破壊され、関口大洗堰、土手が潰され、牛込領(新宿区)に浸水し、音羽町 9 丁目(文京区)の堤防も破壊された。小日向(文京区)では床上の浸水が 5 尺(約 165cm)に及ぶところもあった。

これらにおいて江戸幕府は 3 日(新暦:1742 年 9 月 1 日)午前 1 時から 3 時頃、新大橋、永代橋等の通行を一切禁止するとともに、新大橋、両国橋の東西に各 2 隻ずつ合計すると 8 隻の渡し舟を設置し、両国橋、新大橋などの修復活動も始め、4 日(新暦:1742 年 9 月 2 日)午前 3 時から 5 時頃、本所、深川方面の避難者を救助するために船を出させた。5 日も救助船は出て、水戸侯等の船にて救助される。その日、新大橋の修理作業が完了し、避難者の通行を許す形をとった。

6 日(新暦:1742 年 9 月 4 日)午前 7 時から 9 時頃からは飢えた民への食料の救助活動

が始まり、これは24日（新暦：1742年9月22日）まで行われた。この間に救助が行き届いていない者も少なからずいたと思われる。

(c) 寛保の水害天候状況

寛保の水害の天候は1742年8月30日（以下新暦表示）に、強い大雨に江戸は襲われている。その後は晴れ間が見える日が続いているが、9月6日に再度の大雨に襲われ、被害がさらに拡大してしまったとされている。風向に関する記録もあまり残ってはいない。緑色の部分は水害発生の初日となっている。（以下同じ）

表4 寛保の水害天候状況

年月日(旧暦)	年月日(新暦)	天候	風向	文献1より
1742年7月28日	1742年8月28日	雨	—	金地院記録
7月29日	8月29日	晴れのち雨	—	金地院記録
8月1日	8月30日	大雨	東南の強風	金地院記録
8月2日	8月31日	雨時々晴れ	風なし	金地院記録
8月3日	9月1日	晴れ	—	金地院記録
8月4日	9月2日	晴れ	—	金地院記録
8月5日	9月3日	晴れ	—	金地院記録
8月6日	9月4日	晴れ	—	金地院記録
8月7日	9月5日	晴れ	—	金地院記録
8月8日	9月6日	大雨	強風	金地院記録

(d) 寛保の水害被害地域

表 5 は寛保の水害の江戸府内における被害地域である。他の水害にも共通しているが、浸水被害は主に本所近辺が多い。1 寸=0.03m、1 尺=0.3m、1 丈=3.0mとしたとき、最低で 0.3m、最高で 4.5mの浸水被害を受けたことが分かる。

表 5 寛保の水害被害地域・浸水状況

町名	被害(水位)	文献1より
両国橋大川通り	1尺	出水一件
法恩寺前代地町	2尺	出水一件
御徒町	2尺	出水一件
本所柳島町	2尺	出水一件
中割下水通り	2尺	出水一件
本所出村町	2尺	出水一件
本所吉岡町	2尺	出水一件
本所長岡町	2尺	出水一件
本所三笠町	2尺	出水一件
本所松倉町	2尺	出水一件
本所長倉町	2尺	出水一件
本所小梅代地町	2尺	出水一件
本所石原	2尺	出水一件
本所堅川通	3~4尺	出水一件
本所清水町	5尺~6尺	出水一件
本所四ツ目	3尺~7尺	出水一件
本所五ツ目	6尺~7尺	出水一件
本所旅所橋~亀戸	7尺	出水一件
浅草三筋町	2尺5寸	承寛集録
浅草阿部川町	2尺5寸	承寛集録
本所一ツ目	1尺5寸	承寛集録
本所六軒掘	2尺5寸~3尺6寸	承寛集録
本所菊川町	4尺~5尺	承寛集録
本所林町	4尺~5尺	承寛集録
羅漢寺	7尺	承寛集録
本所三ツ目	7尺	承寛集録
下平井	1丈3尺	承寛集録
上平井	1丈3尺	承寛集録
亀戸天神	4尺	承寛集録
南割下水	2尺4寸~3尺5寸	承寛集録
本所石原	2尺4寸~3尺5寸	承寛集録
北割下水	1丈5尺	承寛集録
牛島	1丈5尺	承寛集録
浮地寺	1丈5尺	承寛集録
本所猿江	7尺	寛保江戸洪水記
浅草今戸橋	5尺	寛保江戸洪水記
品川八ツ山	7寸~1尺	寛保江戸洪水記
浅草御蔵前	7、8尺	寛保江戸洪水記

町名	被害(水位)	文献1より
小石川小日向水道町	床上、1尺5寸	出水一件
小石川小日向東古川町	床上、3尺5寸	出水一件
小石川小日向西古川町	床上、4尺	出水一件
小石川小日向松ヶ枝町	床上、5尺	出水一件
音羽町9丁目	3尺	出水一件
深川扇橋	2尺	出水一件
深川西町	2尺	出水一件
本所菊川町	2尺	出水一件
本所竪川通二ツ目	1尺~2尺	出水一件
本所竪川通三ツ目	1尺~2尺	出水一件
本所竪川通四ツ目	2尺	出水一件
柳島町	4尺	出水一件
本所五ツ目	3尺	出水一件
法恩寺前	3尺	出水一件
業平橋	3尺~4尺	出水一件
柳原2丁目	2尺	出水一件
柳原3丁目	2尺	出水一件
柳原4丁目	2尺	出水一件
柳原5丁目	2尺	出水一件
柳原6丁目	2尺	出水一件
茅場町	2尺	出水一件
松代町	2尺	出水一件
中之郷瓦町	5尺	出水一件
羅漢寺	3尺	出水一件
旅所橋通り	1尺~2尺	出水一件
亀戸天神前	3尺	出水一件

2-3. 天明の水害

(a) 天明の水害内容(江戸府内)

天明6年7月12日(新暦:1786年8月5日)午前1時~3時の夜中より、江戸に数日間大雨が降った。この大雨の影響で、江戸の至るところが浸水してしまったとされる。この年は6月の初旬から雨が降る日が多く、それらに加え、この大雨をもってして中洲(日本橋)・両国橋東岸など大きな被害を出し、隅田川を狭め、河川の流通を妨げていった。その結果ついに7月18日(新暦:8月11日)の午後1時~3時、絶頂を迎えてしまったとされている。

被害が最も大きくなってしまった地域は小石川・下谷・浅草・本所・深川などであり、番町(麴町)のような高地であっても浸水は床上にまで到達したとされている。その他にも市内各所が出水し、土地、石壁などが崩壊を続けた。

橋の流失、或いは破損してしまったのは、永代橋・新大橋を始めとし、江戸川及び下流の神田川の橋、浅草・本所・深川など各地の川に架かる橋は破壊されていった。両国・大川の二つの橋と千住大橋はわずかに事なきを得たとされている。

これにおいて江戸幕府は16日(新暦:8月9日)午前9時~11時、出水地に近親者がいるもの以外の両国橋の通行を禁止とすることを命じた。18日(新暦:8月11日)午後1時~3時に両国の川の河畔に簡易的な小屋を設置し、被災者の救援活動を開始し、20日(新暦:8月13日)午後5時~7時には、物価の高騰などを一切行わないように厳しく命じたとされている。そうした考えの元、8月2日(新暦:8月25日)午後5時~7時には、出水の影響を大きく受けている地域の者に限り、物資を借りていく事が許された。

(b) 天明の水害天候状況

表6は天明の水害の天候状況である。期間は三大水害では最も短い7日間であるが、雨の止む日は一日もなく河川の水位の低下などには時間がかかったと考えられる。

表6 天明の水害天候状況

年月日(旧暦)	年月日(新暦)	天候	風向	文献1より
1786年7月12日	1786年8月5日	晴れのち雨	強風	後見草
7月13日	8月6日	雨	—	後見草
7月14日	8月7日	雨	—	後見草
7月15日	8月8日	雨	—	後見草
7月16日	8月9日	雨	—	後見草
7月17日	8月10日	雨	—	後見草
7月18日	8月11日	雨	—	後見草

(c) 天明の水害被害地域

表7は天明の水害の江戸府内における被害地域である。水位は1.8m～4.8mと非常に大きな被害が出ている。現在の江東区周辺を中心にして、御茶ノ水や千住、浅草など非常に広範囲にわたって記録が残されている。

表7 天明の水害被害地域・浸水状況

町名	被害(水位)	文献1より
熊井町	1丈5.6尺	翁草
西永代町	1丈5.6尺	翁草
材木町	1丈5.6尺	翁草
平野町	1丈5.6尺	翁草
万年町	1丈5.6尺	翁草
大工町	1丈5.6尺	翁草
清澄町	1丈5.6尺	翁草
霊岸寺門前	1丈5.6尺	翁草
深川元町	1丈5.6尺	翁草
六間堀町	1丈5.6尺	翁草
森下町	1丈5.6尺	翁草
御船蔵前町	1丈5.6尺	翁草
本所猿江町	1丈5.6尺	翁草
菊川町	1丈5.6尺	翁草
松井町	1丈5.6尺	翁草
林町	1丈5.6尺	翁草
吉田町	1丈5.6尺	翁草
吉岡町	1丈5.6尺	翁草
中之郷元町	1丈5.6尺	翁草
小梅町	1丈5.6尺	翁草
松倉町	1丈5.6尺	翁草
鹿原町	1丈5.6尺	翁草
石原新町	1丈5.6尺	翁草
荒井町	1丈5.6尺	翁草
小石川	5.6尺	續日本王代一覽
御茶ノ水昌平橋	5.6尺	續日本王代一覽
筋違橋	5.6尺	續日本王代一覽
浅草御門	5.6尺	續日本王代一覽
柳橋	5.6尺	續日本王代一覽
上野	1丈以上	續日本王代一覽
下野	1丈以上	續日本王代一覽
浅草新堀	床上に及ぶ	曲亭雜記
下谷	床上に及ぶ	曲亭雜記
吉原	床上に及ぶ	曲亭雜記
浅草御蔵前	6尺	曲亭雜記
平井	1丈3尺	曲亭雜記
木根川	1丈3尺	曲亭雜記
本所石原	床上5.6尺	見聞雜録
亀戸	軒の上2.3尺	見聞雜録
東葛西	1丈2.3尺	見聞雜録
西葛西	1丈2.3尺	見聞雜録
行徳	1丈2.3尺	見聞雜録
竹の塚	1丈2.3尺	見聞雜録

町名	被害(水位)	文献1より
草加	1丈2,3尺	見聞雑録
岩槻	1丈2,3尺	見聞雑録
眞間	1丈2,3尺	見聞雑録
中山	1丈2,3尺	見聞雑録
釜屋堀	1丈2,3尺	見聞雑録
五百羅漢	1丈2,3尺	見聞雑録
千住	1丈2,3尺	見聞雑録
角田川	1丈2,3尺	見聞雑録

2-4. 弘化の水害

(a) 弘化の水害内容(江戸府内)

弘化3年6月、関東諸国に長期的な雨が降った。6月3日(新暦:1846年7月25日)、午後5時から7時頃、雷を伴った大雨が江戸に降り始めた。特に6月11日(新暦:1846年8月2日)、12日(新暦:1846年8月3日)、15日(新暦:1846年8月6日)、18日(新暦:1846年8月9日)などに非常に強い大雨が降り、江戸川、荒川、多摩川が氾濫してしまった。その後も雨を見ない日はなく、27日(新暦:1846年8月18日)午前7時から9時から大雨が降りだしてしまった。これによって利根川、江戸川、中川の堤防に負荷がかかっていき、28日(新暦:1846年8月19日)午前9時から11時頃に武蔵国埼玉郡本川俣村(現、川俣村、埼玉県北東部)において利根川の堤防が決壊してしまった。同時期に淵江領(現、足立区南東部)においても中川の堤防が決壊している。一方、荒川付近においても河川が大雨により水が溢れ出ており、千住河原(現、足立区)、小塚原(現、荒川区)、箕輪(現、三ノ輪)などを浸水させ、29日(新暦:1846年8月20日)午前11時から午後1時頃、千住宿三丁目(足立区南部)の堤防が決壊してしまい、小菅(現、葛飾区)付近より本所の大部分、深川の一部にかけて浸水し、被害は床上三尺に及ぶものとなってしまった。

大川橋、新大橋、永代橋では損傷がひどい状況で通行を禁止とした。

その後、7月9日(新暦:1846年8月30日)まで、晴れ間の見える日も続いたが、就寝中の7月6日(新暦:1846年8月27日)午前1時から3時頃の夜より、7日(新暦:1846年8月28日)にかけてはまた大雨が降っており、9日(新暦:1846年8月30日)午前7時から9時には淵江領(現、足立区南東部)で中川の堤防で再度の決壊が発生してしまった。そのため、葛西の大半はもちろん本所、深川よりさらに浸水の量を増し、多数の被災者を生んでしまった。

町奉行所・船手方・代官所などが救助船をだし、被災者を避難させる活動を行った。この洪水の修復活動などはこの年の10月から12月をもって行われた。

(b) 弘化の水害天候状況

表 8 は弘化の水害の天候状況である。弘化の水害は他の水害よりも非常に期間が長く、約一ヶ月間にわたって天候が優れない日が続き、河川の水位の低下などには時間がかかったと考えられる。風向に関しても非常に細かく記録が残っている。

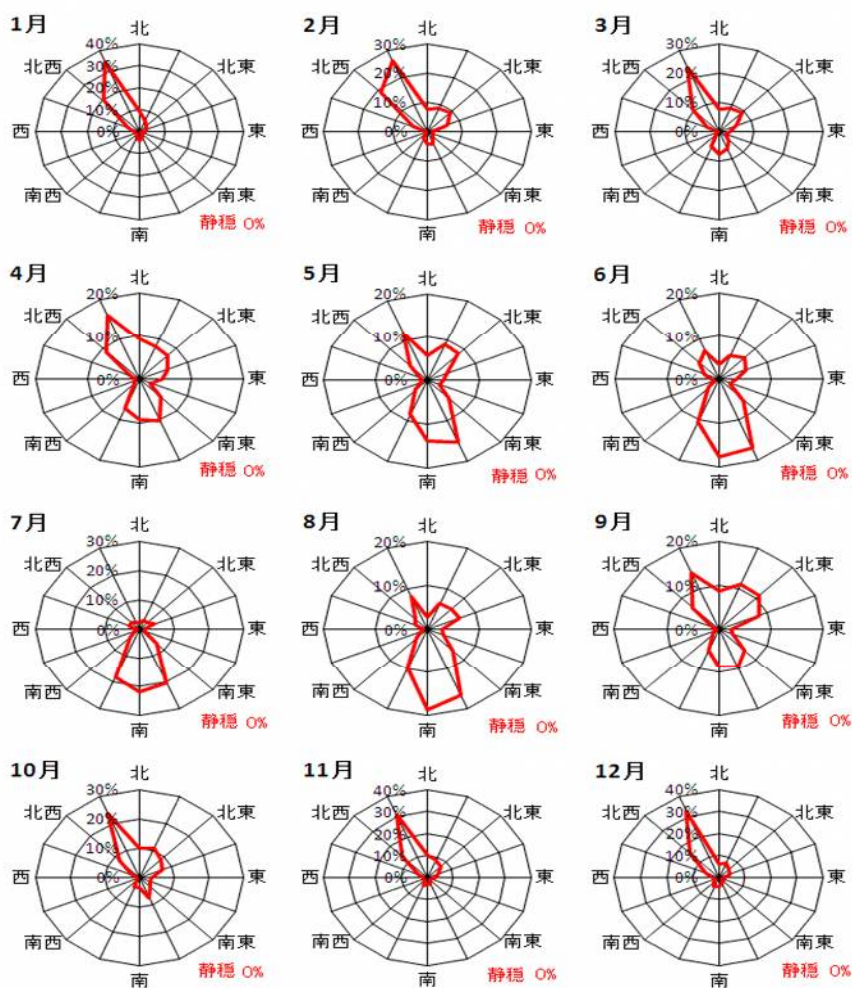
表 8 弘化の水害天候状況

年月日(旧暦)	年月日(新暦)	天候(朝、正午、夜)	風向	文献1より
1846年6月1日	1846年7月23日	曇り、雨、曇り	西北風	霊憲候簿
6月2日	7月24日	曇り、薄曇り、薄曇り	東南風	霊憲候簿
6月3日	7月25日	曇り、晴れ、雷雨	東北風	霊憲候簿
6月4日	7月26日	晴れ、曇り、曇り	東北風→西風	霊憲候簿
6月5日	7月27日	晴れ、曇り、曇り	南風	霊憲候簿
6月6日	7月28日	晴れ、曇り、雨	東南風→東風	霊憲候簿
6月7日	7月29日	曇り、雨、大雨	南風→西南風	霊憲候簿
6月8日	7月30日	曇り、晴れ、曇り	南風	霊憲候簿
6月9日	7月31日	曇り、曇り、曇り	東南風	霊憲候簿
6月10日	8月1日	曇り、曇り、曇り	東風→北風	霊憲候簿
6月11日	8月2日	曇り、曇り、大雨	東南風	霊憲候簿
6月12日	8月3日	晴れ、曇り、大雨	東南風	霊憲候簿
6月13日	8月4日	晴れ、曇り、晴れ	東北風→東風	霊憲候簿
6月14日	8月5日	晴れ、晴れ、晴れ	東北風	霊憲候簿
6月15日	8月6日	曇り時々大雨	強い東北風	霊憲候簿
6月16日	8月7日	曇り、大雨、曇り	西北風→東風	霊憲候簿
6月17日	8月8日	曇り、曇り、曇り	東北風→東南風	霊憲候簿
6月18日	8月9日	深い霧、曇り、大雨	東南風	霊憲候簿
6月19日	8月10日	曇り、曇り、曇り	東南風→東風	霊憲候簿
6月20日	8月11日	雨、雨、曇り	東南風→南風	霊憲候簿
6月21日	8月12日	小雨、曇り、晴れ	東南風	霊憲候簿
6月22日	8月13日	雨、曇り、曇り	東風	霊憲候簿
6月23日	8月14日	曇り時々大雨	東風	霊憲候簿
6月24日	8月15日	小雨、雨、曇り	東北風	霊憲候簿
6月25日	8月16日	雨、雨、曇り	東北風→北風	霊憲候簿
6月26日	8月17日	雨、雨、雨	東北風	霊憲候簿
6月27日	8月18日	雨、大雨、雨	東北風	霊憲候簿
6月28日	8月19日	曇り時々大雨	東風	霊憲候簿
6月29日	8月20日	曇り、曇り、曇り	東南風	霊憲候簿
6月30日	8月21日	曇り、曇り、晴れ	東南風→東風	霊憲候簿
1846年7月1日	8月22日	曇り時々大雨	東風→東北風	霊憲候簿
7月2日	8月23日	曇り、曇り、晴れ	東風	霊憲候簿
7月3日	8月24日	晴れ、晴れ、晴れ	東風→東南風	霊憲候簿
7月4日	8月25日	強い雨	東北→北風	出水一件
7月5日	8月26日	曇り、晴れ、雨	北風	出水一件
7月6日	8月27日	曇り、曇り、曇り	北風→東風	出水一件
7月7日	8月28日	雨、曇り、曇り	東風→東南風	出水一件
7月8日	8月29日	曇り、曇り、晴れ	南風→東南風	出水一件
7月9日	8月30日	雨、曇り、晴れ	東南風→強西南風	出水一件

(c) 風配図

風配図とはある地点のある期間における各方位の風向および風速の頻度を表している図である。その場所の風の特徴などを知るために利用されている。

弘化の水害では災害自体の期間が他と比べて長いことと、参考文献に災害期間中の風向が細かく記載されているので、東京都の風配図とデータを照らし合わせる事が可能である。新暦期間で主に 8 月が災害期間と判断することが可能なので、本論では東京都の 8 月の風配図を比較対象とする。



参考 東京管区气象台 HP URL : <http://www.jma-net.go.jp/tokyo/>

8月の風配図を見てわかる通り、東京都の8月の風はほとんどが南側から吹いている。江戸時代に現代のような観測機器は存在しているはずもないが、表 8 の風向の記録でも南からの風が比較的多くなっていた。ほぼ 8 月中は吹くことのない西風が記録にもあまりなかったことが分かる。

(d) 隅田川の出水状況

文献 1 には弘化の水害に関して隅田川の出水状況が細かく記録されている。三大水害のいずれも現代の江東区、墨田区、台東区などに被害が集中していることから隅田川との関係が重要であることが分かる。

表 9 隅田川出水状況

年月日(旧暦)	年月日(新暦)	水位	河川状況	文献1より
1846年6月21日	1846年8月12日	2尺5寸増水	水勢い強く、濁る	加藤又左衛門 中村八郎左衛門 本所見廻
6月22日	8月13日	2尺8寸増水		加藤又左衛門 中村八郎左衛門 本所見廻
6月23日	8月14日	3尺2寸増水	水勢いさらに強く、神田川も濁り勢い強く	加藤又左衛門 中村八郎左衛門 本所見廻
6月26日	8月17日	2尺6寸増水		加藤又左衛門 中村八郎左衛門 本所見廻
6月27日	8月18日	3尺3寸増水	神田川→勢い、濁り強まる	加藤又左衛門 中村八郎左衛門 本所見廻
6月27日～28日	8月18日～19日	4尺8寸増水		加藤又左衛門 中村八郎左衛門 本所見廻
6月28日	8月19日	夕方5尺5寸増水		加藤又左衛門 中村八郎左衛門 本所見廻
6月29日	8月20日	6尺7寸増水	水勢い強烈	加藤又左衛門 中村八郎左衛門 本所見廻
6月30日	8月21日	6尺2寸増水	前日に比べ勢い緩む。 神田川も同様。	加藤又左衛門 中村八郎左衛門 本所見廻
1846年7月2日	8月23日	5尺8寸増水	前日同様勢い、 濁り緩む	加藤又左衛門 中村八郎左衛門 本所見廻
7月3日	8月24日	4尺9寸増水	勢い緩む	加藤又左衛門 中村八郎左衛門 本所見廻
7月4日	8月25日	4尺3寸増水	勢い緩む、神田川も同様	加藤又左衛門 中村八郎左衛門 本所見廻
7月7日	8月28日	3尺8寸増水	勢い、濁りともに緩む	加藤又左衛門 中村八郎左衛門 本所見廻
7月8日	8月29日	4尺3寸増水	少々強まる、夕方 5尺増水。	加藤又左衛門 中村八郎左衛門 本所見廻
7月9日	8月30日	5尺8寸増水	強まる、神田川も同様	加藤又左衛門 中村八郎左衛門 本所見廻
7月10日	8月31日	5尺3寸増水	少々緩む、濁りも同様	加藤又左衛門 中村八郎左衛門 本所見廻
7月13日	1846年9月1日	3尺5寸増水	ある程度穏やかになる	加藤又左衛門 中村八郎左衛門 本所見廻

(e) 弘化の水害被害地域

表 10 は弘化の水害の江戸府内における被害地域である。浸水被害は 01.5m～1.5m と他の水害と比べると、水位は低かったと記録されている。特に本所、深川の被害が多い水害でもあり、文献 1 に記録はないが、浅草で 1.35m の浸水被害があった記録も残っており、大きな水害であったことが分かる。

表 10 弘化の水害被害地域・浸水状況

町名	被害(水位)	文献1より
深川猿江町	3尺、床上1尺	名主 茂左衛門
深川大島町	5尺、床上2尺	名主 茂左衛門
深川元町	1尺	名主 忠左衛門
深川常磐町	2尺	名主 八左衛門
深川富川町	2尺3寸、床上4、5寸	名主 八左衛門
深川猿江裏町	2尺8寸、床上2寸	名主 八左衛門
深川東町	2尺8寸、床下1、2寸	名主 八左衛門
泉養寺門前	5尺、床上2尺	名主 忠左衛門
本所緑町4丁目	4、5寸	名主共
本所緑町5丁目	4、5寸	名主共
本所花町	4、5寸	名主共
本所入江町	4、5寸	名主共
本所三笠町1丁目	6、7寸	名主共
本所三笠町2丁目	6、7寸	名主共
本所長岡町1丁目	6、7寸	名主共
本所長岡町2丁目	6、7寸	名主共
本所吉田町	1尺	名主共
本所吉岡町	1尺	名主共
茅場町1丁目	7、8寸	名主共
茅場町2丁目	7、8寸	名主共
茅場町3丁目	4、5寸	名主共
本所柳原町1丁目	4、5寸	名主共
本所柳原町3丁目	7、8寸	名主共
本所柳原町4丁目	7、8寸	名主共
本所徳右衛門	8、9寸	名主共
柳原横町通	1尺	名主共
本所亀澤町	2、3寸	名主共
本所林町横町	1尺5寸	名主 助左衛門
本所林町4丁目	5寸	名主 助左衛門
本所林町5丁目	5寸	名主 助左衛門
本所林町5丁目横町	1尺、床下5、6寸	名主 助左衛門
本所菊川町1丁目	7寸	名主 助左衛門
本所菊川町2丁目	7寸	名主 助左衛門
本所菊川町3丁目	7寸	名主 助左衛門
本所菊川町4丁目	7寸	名主 助左衛門
深川要津寺門前	1尺	名主 助左衛門
本所松倉町	2尺～3尺、床上1尺	名主 佐次右衛門

町名	被害(水位)	文献1より
中之郷成就寺前	5寸~1尺	名主 佐次右衛門
中之郷如意輪寺前	1尺	名主 佐次右衛門
小梅延命寺門前	5寸~1尺	名主 佐次右衛門
亀戸町	5寸~3尺	名主 佐次右衛門
亀戸町境町	5寸~3尺	名主 佐次右衛門
柳島境町	5寸~3尺	名主 佐次右衛門
亀戸清水町	5寸~3尺	名主 佐次右衛門
深川北松代町	5寸~3尺	名主 佐次右衛門
中之郷五之橋町	5寸~3尺	名主 佐次右衛門
小梅五之橋町	5寸~3尺	名主 佐次右衛門
本所横川町	5寸~3尺	名主 佐次右衛門
本所出村町	5寸~3尺	名主 佐次右衛門
深川六間堀代地	5寸~3尺	名主共
南本所石原町	1尺~1尺5寸	佐次右衛門
南本所外手町	3尺、床下3寸	佐次右衛門
本所横綱町	2尺~2尺5寸、床下5寸	佐次右衛門
本所元瓦町	5、6寸	佐次右衛門
本所扇橋代地町	2尺5、6寸~3尺、床上2、3寸	佐次右衛門
羅漢寺前	7、8寸	茂左衛門
五之橋通	7、8寸	茂左衛門
本所柳嶋町	5、6寸~1尺	名主 次郎助
法恩寺橋通り	5、6寸~1尺	名主 次郎助
本所新町	2尺~3尺、床上1尺	名主 佐次右衛門
北本所番場町	1尺~2尺	名主 佐次右衛門
北本所表町	2尺5寸	名主 佐次右衛門
北本所荒井町	5寸~1尺	名主 佐次右衛門
小梅代地町	5寸~1尺	名主 佐次右衛門
中之郷八軒町	5寸~1尺	名主 佐次右衛門
中之郷瓦町	1尺~2尺	名主 佐次右衛門
中之郷元町	5寸~1尺	名主 佐次右衛門
中之郷竹町	5寸~1尺	名主 佐次右衛門
中之郷原庭町	1尺5寸~2尺	名主 佐次右衛門
小梅瓦町	1尺~2尺	名主 佐次右衛門
中之郷御用屋敷	1尺~2尺	名主 佐次右衛門

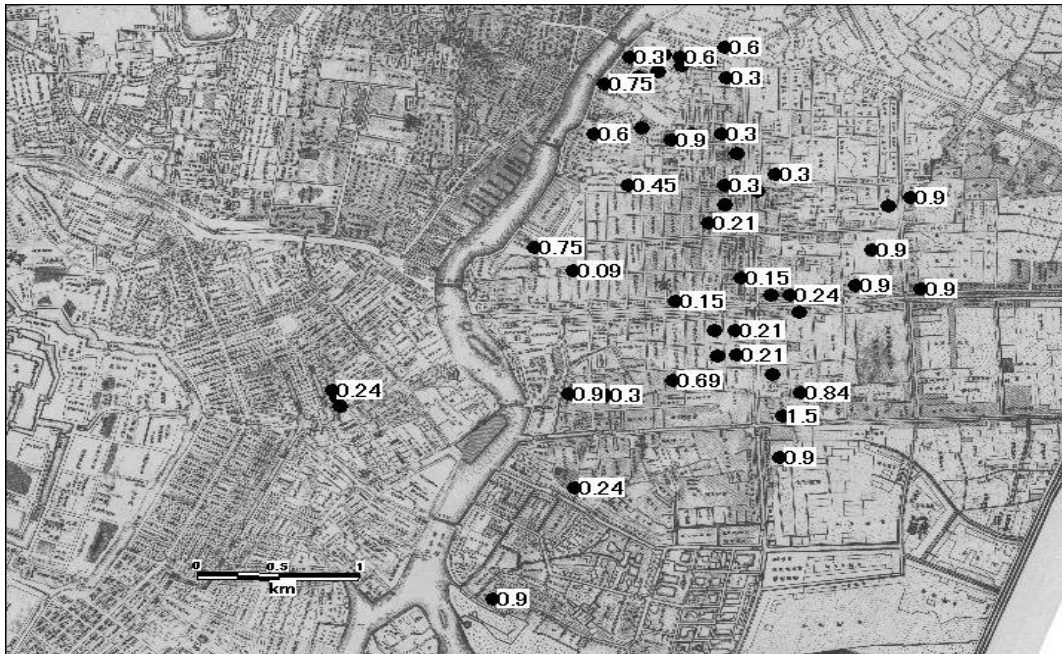


図5 弘化の水害 江戸の浸水被害地域

図3～5は文献1により、浸水被害を受けた記録が残っている地域を地図上に落とし込んだものであり、数字の単位はメートルになっている。これらの図は第2章の浸水被害の表から作成しており、それにより、水位も分かるようになっている。これらを見る限り、やはり、被害の地域は本所、深川が大半を占めていることが分かる。

隅田川を中心として地図をみると、左岸側に被害が集中しており、右岸側では浸水した記録が残っている地域は比較的少なくなっている事が分かる。これは日本堤などの堤防を幕府が作り、両岸の堤防の高さを調節し、浅草方面の被害が小さくて済むように考慮していた為だと考えられる。

また、寛保の水害では江戸府内で死者が6864人、天明と弘化の水害については江戸府内における死者数は不明であるが、罹災者がそれぞれ5323人、2929人と江戸だけでも非常に大きな被害となっており、江戸府内以外の地域も合わせると、寛保の水害の死者は約14000人、天明の水害の死者は30000人と被害地域全体で見ても非常に大きな災害である事が分かる。

第4章. 水害の救済活動について

4-1. 水害の救済活動

文献2には幕府による水害の救済活動が記録されている。救済活動は主に幕府の指示によって町奉行所が活動の計画を考え、救助船、避難所の設置、炊き出しなど行われ、もちろん無償という事ではなく、幕府から金銭が支払われた。

その他には町方施行と呼ばれる町人によるボランティア団体が存在し、活動が積極的に行われたとされている。

4-2. 救助船の活動

表11 救助船の活動概要

	総救助人数	総救助船数	一船当たりの救助人数
寛保2年	3357	1218	2.8
天明6年	5113	205	24.9
弘化3年	3769	1071	3.5

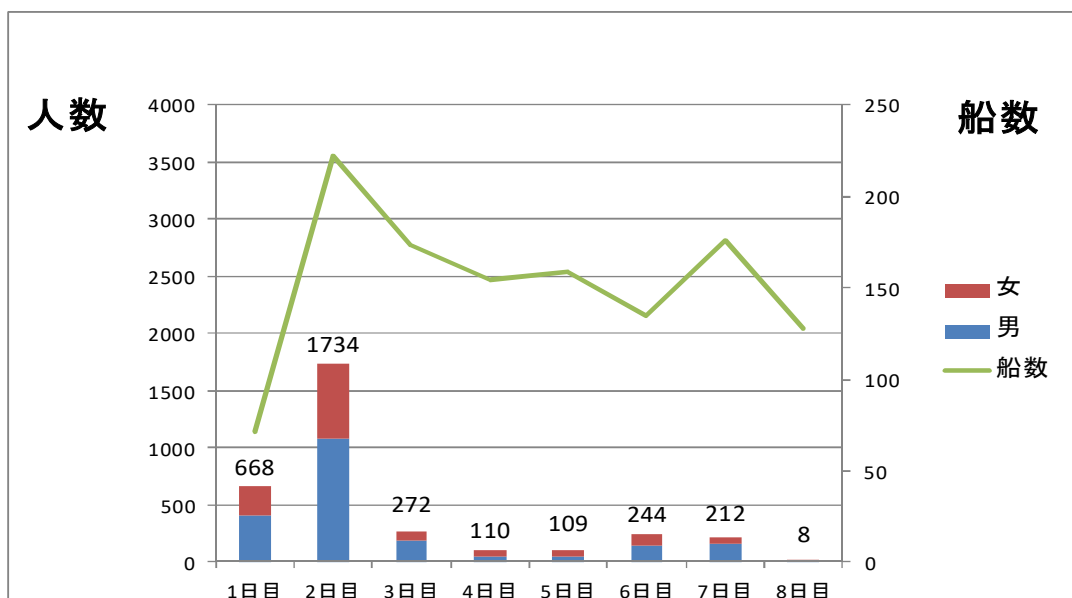


図6 寛保の水害 救助船の活動

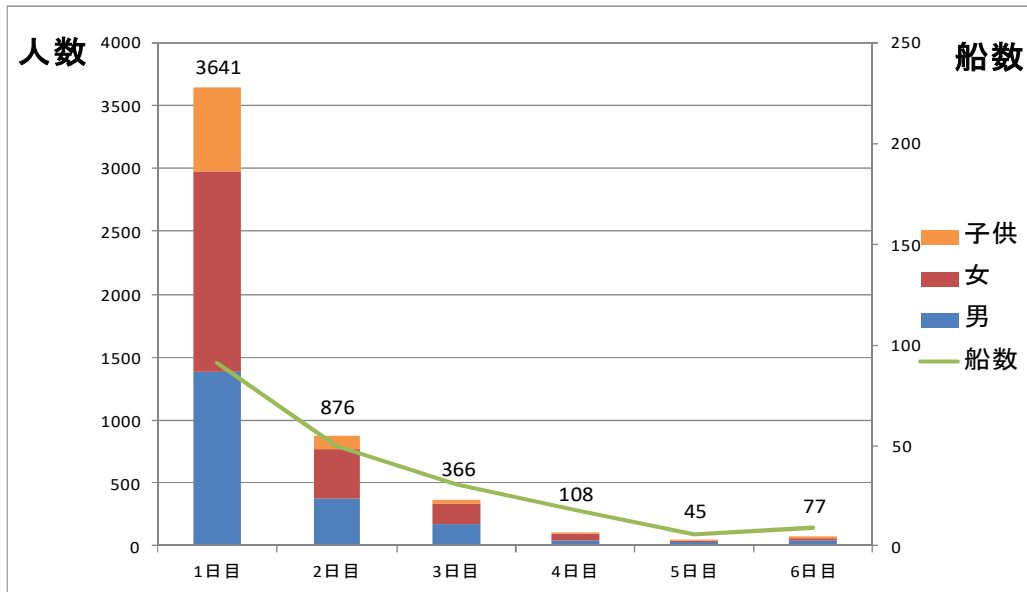


図7 天明の水害 救助船の活動

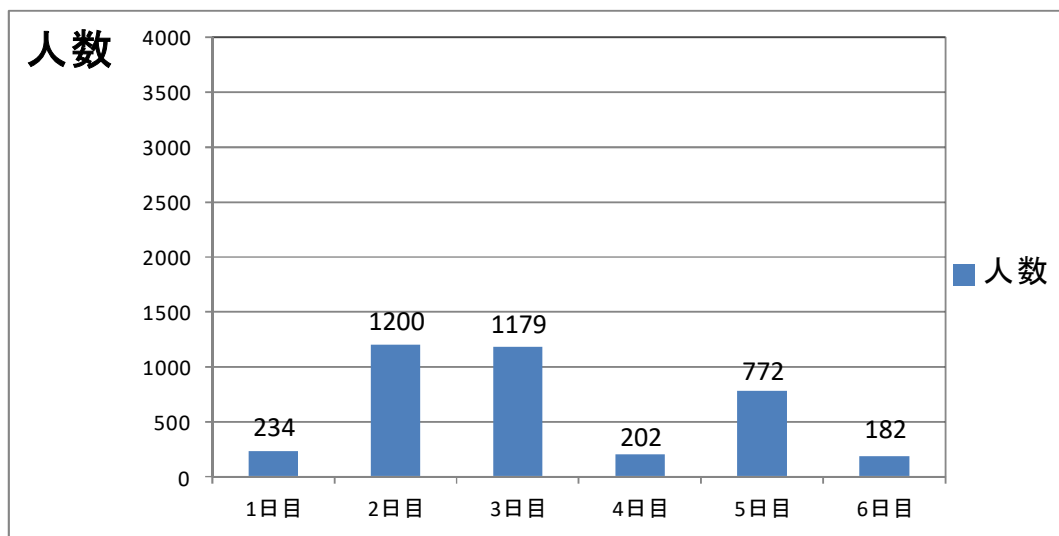


図8 弘化の水害 救助船の活動

表 11 は救助船の活動の概要であり、図 6～8 は三大水害における救助人数と救助船数を日付とともにグラフにしたもので、救助人数を棒グラフ、船数を折れ線グラフで示しており、寛保、天明の水害では男女比等も記録が残っている。期間は災害発生初日の翌日が 1 日目となっている。

寛保の水害の救助活動では、1日目よりも2日目に救助した人数が多くなっており、救助されたのは男性の方多くなっている。天明の水害はどの水害と比べても、1日目に救助した人数が非常に高い数字となっており、その後、日の経過とともに救助人数は減少していくことから、効率の良い救助活動を行っていた事が分かる。弘化の水害は男女比が記録されておらず、救助船数に関しては、総数は1071艘で日付毎の活動数は記録がなかった。

救助の概要より、寛保、弘化の水害は救助人数、救助船数ともに近い数字となっており、江戸においての被害は同程度だったのではないかと推測される。天明の水害は救助人数は女性、男性、子供の順となっており、救助総数は天明の水害が最も多い5113人となっている。

4-3. カスリーン台風

表 12 カスリーン台風概要

	発生年月日	死者(名)	行方不明(名)	負傷者(名)	救助人数(名)
カスリーン台風	1947年9月8日～17日	1077	853	1547	75061

現代の大きな水害の一つであるカスリーン台風と江戸三大水害を比較すると、カスリーン台風は三大水害に比べて死者数が少なく、救助人数が圧倒的に多いという事が分かる。もちろん江戸時代と現代では救助の設備や救助船の機能などに大きな違いがあると思われるが、これらを比較してみると、如何に水害発生時の救助活動が重要かという事が分かる。

第5章. まとめ

まず、寛保、天明の水害はともに死者数が 10000 人以上と記録されている事、弘化の水害に関しては、死者数不明であるが、江戸府内の浅草で 1.35mにも及ぶ浸水被害が発生している事などが江戸三大水害と呼ばれている要因になっていると考える。被害地域も隅田川の右岸側である、本所や深川に集中している事も江戸の水害の一つの特徴であると言える。本研究で主に用いた、文献 1・2 には水害の天候など詳しく記録されていたが、風向に関しては、弘化の水害以外詳しい記録はなかった。また、寛保の水害では江戸府内だけで 6864 人の死者が出ているが、天明、弘化の水害に関しては記録が残っていない。天明の水害の初日の救助人数が 3641 人と非常に多く、初日の人数だけで、他の二つの水害の救助総数とほぼ同じ値となっている。個人的な意見だが、寛保の水害は初日の救助人数がもう少し増えなかったものかと感じてしまう。浸水被害で水位も同程度、同じ山水・地水が原因、両水害ともに全国的に見ても被害地域が広い事などから、同レベルの水害だったのではないかと考えられるので、救助活動も同じように行えて、被害も小さくする事が出来たのではないだろうか。

参考文献

-
- 畠山久高 気象災害 土木学会 共立出版 1966 年
水利科学研究所 水利科学 第 34 卷 第 192—197 号 土木学会 1990 年
東京市 東京市史稿 変災篇 2・3 1917 年
東京市 東京市史稿 救済篇 1・2・4 1922 年

付録

第1部 歴史時代

701~1900年
(大宝元年~明治33年)

294—第7章 災害災害年表

西暦年月日	年号(旧月日)	災害種別	被害地域(府県別) 被害概要	おもな出典	社会・政治状態
701.10.1	大宝 1. 8. 21	風水害	神奈川・新瀉・石川・福井・長野・前関・愛知・滋賀・京都・和歌山・鳥取・島根・岡山・広島・山口・愛媛	続日本紀, 日本紀略	(701)大宝律令なる
706	慶雲 3.	飢	石川・福井・和歌山・鳥取・広島・愛媛	続日本紀, 芸藩通志	
709. 7. 5	和銅 2. 5. 20	長雨	山梨・静岡・京都・大阪・兵庫	続日本紀	
763	天平宝字 7.	大旱・飢	岩手・宮城・秋田・山形・石川・福井・岐阜・大阪・山口・徳島	続日本紀, 大日本史	(710)奈良遷都 (794)平安遷都
843	承和10.	飢	岩手・宮城・埼玉・千葉・石川・福井・鳥取・山口・愛媛・佐賀・鹿児島		続日本紀(菅野直道)なる (858)藤原氏摂政始まる (901)三代実録(藤原時平)なる
860.10.6	貞観 2. 9. 14	暴風雨	滋賀・京都・兵庫・奈良・和歌山・鳥取	三代実録	(927)延喜式なる日本人口 5,473,100人
989. 9. 20	永祿 1. 8. 13	暴風高潮	東京・滋賀・京都・兵庫・奈良・鳥取	日本紀略, 扶桑略記, 帝王編年記, 今昔物語	(1192)源頼朝, 鎌倉幕府開く 日本封建制確立
1201. 9. 16	建仁 1. 8. 11	暴風雨	茨城・栃木・埼玉・千葉・東京・神奈川・京都・兵庫・奈良 (下総国葛西郡海邊, 潮率人屋, 千余人漂没(首書見))	吾妻鏡, 鶴岡社務記録, 三長年記, 猪俣願白記	
1230.10.22	寛喜 2. 9. 8	暴風雨	栃木・埼玉・千葉・東京・神奈川・富山・三重・滋賀・京都・兵庫・奈良	百練抄, 明月記, 助仲記, 吾妻鏡, 皇朝紀抄	
1258. 9. 6	正嘉 2. 8. 1	暴風雨	茨城・栃木・埼玉・東京・神奈川・山梨・滋賀・京都	百練抄, 神明鏡, 吾妻鏡, 北条九代記	(1286)吾妻鏡なる
1274.11.26	文永11.10.20	大風(嵐)	福岡・佐賀 元, 高麗軍 13,500人溺死(文永の役)	史料綜覧	
1281. 8. 23	弘安 4. 閏 7. 1	暴風雨	三重・京都・兵庫・奈良・福岡・佐賀・大分 松浦湾で元 高麗軍 10 万人溺死, 北西風による(弘安の役) (七月一日おびただしき大風吹きて第百の船六万騎兵のりて嵐幸へよりたみな吹散られぬれば, あるは水にしづむをのづからのこれるもなく本國へ降りけり(増茂))	一代要記, 助仲記, 子章記, 八幡息通記, 天地根元歴代園増鏡, マルコポーロ旅行記	(1338)足利尊氏征夷大将軍となる

1370. 9. 18	建徳 1. 8. 20	暴風雨	茨城・栃木・埼玉・東京・神奈川	続史愚抄	(1392)南北朝合一
1420 夏	応永27.	大飢	早宮城・福島・茨城・栃木・東京・京都・奈良・和歌山 饑饉(畿内西國雖不飢人民多餓死(北川孝年代記))	野史, 南方紀伝	
1475. 9. 15	文明 7. 8. 6	暴風雨洪水	山梨・滋賀・京都・大阪(死者数百人) 兵庫・奈良(和泉, 堺 高潮打入, 在家数千間, 船数百艘, 人民数百人, 被引大流, 無餘形失了, 及数百才不測先例希有事也(大乗院寺社雜事記))	親長卿記, 大乗院寺社雜事記, 吾國郡記, 鎌倉大日記, 実隆公記	(1467~1477)応仁の乱 (1498. 9)東海道大地震大津波を伴う, 浜名湖湾に通ず
1503	文龜 3.	大飢	早宮城・福島・茨城(餓死多数) 栃木(死多数) 東京(死多数) 石川・京都・鳥根・福岡(死多数) 佐賀(死多数) 宮崎 (五月二十八日より八月まで大旱魃, 依之五畿皆かれ失せ人民多餓死す(日向記))	日向記・永禄年代記 会津藩事土書考	
1518. 2. 5	永正15.12.15	大雪	神奈川・石川・静岡・京都・大阪・東京(積雪1.5m)	二水記, 続本朝通鑑	
1535 夏	天文 4.	大旱	早宮城・福島・茨城・栃木・東京・神奈川・石川・福井・奈良・山口 (旧二月二七日から六月二九日まで雨降らず)	後奈良院家記, 興福寺略年代記, 快元僧都記 続本朝通鑑	
1536. 5~8	天文 5.	長雨	福島・福井・山梨・京都	妙法寺記, 野史, 続本朝通鑑	
1540. 9. 21	天文 9. 8. 11	暴風雨	福島・茨城・栃木・埼玉・東京・神奈川・福井・山梨 京都・兵庫・奈良	鹿苑日録, 二條寺主家抜, 快元僧都記, 塔寺長振	
1544. 8. 7	天文13. 7. 9	暴風雨	山梨・岐阜・愛知(死者有)・滋賀・京都(死者多し) 大阪・兵庫・奈良・鳥根・大分(死者有)	宮繼卿記, 野史, 続史愚抄	
1557. 9. 26~28	弘治 3. 8. 24	暴風雨	三重(死者多し)・京都・大阪・兵庫・奈良・和歌山 (大阪湾沿岸高潮で数千人の死者あり, 80年来の大洪水)	細川両家記, 足利季世記 続史愚抄	(1540)ザウイムル, ヤリスト教を伝う (1585)秀吉関白となる
1596. 7. 14	慶長 1. 6. 19	洪水	栃木・埼玉・千葉・東京(死者300余) 神奈川・山梨(信・甲・関東洪水百年以来の大水という(当代記)) 荒川・入間川・古川田川洪水浸草で3~400人死亡	当代記	(1600)関ヶ原の戦 (1603)江戸幕府開幕 (1605)関東南部大地震 死 5,000 (1615)大阪夏の陣, 豊臣亡ぶ
1612. 7. 20	慶長17. 9. 2	暴風雨	岐阜・静岡・愛知・三重(死者180) 滋賀・京都 兵庫・奈良・岡山(死者5,000)	公室譜略, 当代記 三川記	
1615	元和 1.	凶飢	作曹連(餓死者有)・岩手・宮城・秋田・山形・福島 富山(餓死者多し)・鳥根	日本近世前代史	
1626春~夏	寛永 3.	旱魃	青森・岩手・宮城・茨城・栃木・東京・石川・福井 長野・静岡・愛知・滋賀・京都・兵庫・奈良・鳥根 徳島・香川・愛媛・高知・福岡・熊本・大分	享保以来年代記・続史愚抄 旗陽奇観, 玉露殿, 武江年表	(1637)島原の乱

第7章 災害災害年表 295

西暦年月日	年号(旧月日)	災害種別	被害地域(府県別) 被害概要	おもな出典	社会・政治状態
1640夏~秋	寛永17.	凶作	岩手・秋田・山形・新潟・富山(餓死多し)・石川(17年より連年飢饉甚多し)・相模(餓死多し) (17年より連年飢饉甚多し)・相模(餓死多し)	日本近世飢饉史	(1639)領国令でる
1641夏~秋	寛永18.	凶作	青森・岩手・宮城・山形・富山(餓死多し)・石川(餓死多し)・福井・長野・岐阜・鳥取・山口・福岡・佐賀・熊本	管家見聞記・三遊記	
1642春~夏	寛永19.	飢饉	青森・岩手・秋田・山形・福島・栃木・富山・石川(死多し)・福井・長野・岐阜・兵庫・鳥取・山口・福岡・佐賀・熊本 (前2年の凶作でより夏にかけて天下大飢饉人多く死す(管家見聞記))	管家見聞記・三遊記	
1650. 9.26 ~28	慶安 3. 9. 1	大洪水	新潟・石川・長野・岐阜(死者3,000余)・愛知・三重(死者300余)・滋賀・京都・奈良・鳥取・熊本(死者350)・大分(死者27)・鹿児島(大垣論中改す)	山鹿素行先生日記, 徳川実紀 旗陽奇観	
1653. 9.26	承応 2. 8. 5	洪水	山梨・岐阜・愛知・鳥取・広島(死者5,000)・山口(死者106)・熊本(山口県, 萩城高潮のため破壊, 倒家11,200戸, 死者106人)	肥後年代略記, 芸藩通志	(1657)江戸よりそでの火事(死者102,000)
1668 夏	寛文 8.	旱魃	宮城・福島・茨城・東京・新潟・滋賀・京都・兵庫・奈良・和歌山・岡山・広島・香川	山鹿素行先生日記, 武江年表 宝鑑	
1670. 7.19 ~20	寛文10. 6. 3	洪水	岩手・宮城・秋田・福島・栃木・千葉・東京・神奈川(北上川・中津川大洪水)	徳川実紀・慶延略記 登米部史	
1670. 10. 6	寛文10. 8. 23	暴風雨(高潮)	大版(死者161)・兵庫・奈良・和歌山(浪・播磨高塩家屋949戸流失, 死者2,143人, 破船7,323隻) [山鹿素行先生日記]	山鹿素行先生日記, 玉露叢 史史愚抄	
1673. 6.26 ~29	延宝 1. 5. 12	洪水	石川・兵庫・鳥取(死者70)・鳥取・岡山(死者880)・広島(死者31)・香川・福岡(死者有り)・佐賀・熊本・大分	福山伝記, 因府年表 徳川実紀, 玉露叢	
1675 春	延宝 3.	飢饉	青森・岩手・宮城・秋田・福島・栃木・新潟(死者多し)・石川(死者多し)・福井(死者有り)・長野(死者3,118)・岐阜・鳥取(死者多し)・広島・山口・福岡(是歲, 諸国大に飢乏・餓死に益つ(竹橋余筆))		
1680. 9.28	延宝 8. 閏 8. 6	暴風雨	福島・茨城(死者有り)・東京(死者3,000)・神奈川(死者600)・愛知(死者60)・三重(本所, 深川, 浜町, 雲草島, 鉄砲川, 八丁瀬などで倒れた家3,420戸, 溺死700, 深川で1.2~2.4m受水)	徳川実紀, 山鹿素行先生日記 御營日記, 天字吾妻鏡	(1680)綱吉将軍になる

1681 秋	天和 1.	凶飢	青森・岩手・秋田・山形・埼玉・石川(餓死2,587)・福井・長野・岐阜・愛知(死者百數十人)・徳島(前年秋風水害, 餓死多量, 諸国死籍, 是歲不順風水)	日本近世飢饉史	(1682)八百屋お七の放火(死者3,500)
1695	元禄 8.	飢饉	北海道・岩手・青森・宮城・秋田・山形・千葉・石川(春寒, 夏秋雨秋大風早寒諸国不稔, 奥羽・北陸飢死多し)・岩手(餓死4万), 青森(翌年までに20万餓死す)	日本近世飢饉史	
1699. 9. 8	元禄12. 8. 15	暴風雨	岩手・秋田・山形・福島・茨城・栃木・群馬(死者有り)・東京・神奈川・新潟・石川(死者多し)・福井・山梨・長野・岐阜・静岡・愛知・三重・佐賀	護国院日記抄, 翁草 御当代記	
1702. 9.18 ~24	元禄15. 8. 27 ~9. 2	暴風雨	福井・愛知・兵庫・鳥取(死者50)・鳥取・岡山・広島(死者有り)・山口(死者36)・香川・福岡(死者5)・佐賀・大分・熊本	福府秘要録, 護寺院 盛光僧正日記	(1702)赤穂浪士の討入 (1703)関東南大地震(死者5,233)・嵐20,162 (1707)富士山爆発(宝永山生ず) (1716)吉宗, 将軍となる(享保の改革始る)
1721. 9. 5 ~11	享保 6. 閏7. 14~20	暴風雨	茨城・栃木・群馬・埼玉・千葉・神奈川・富山・長野・岐阜・静岡・愛知・三重・滋賀・京都・大版・兵庫・奈良・和歌山・鳥取・岡山・広島(死者44)・徳島(死者9)・香川・愛媛(死者72)	徳川本代一覽, 野史 月堂見聞集, 旗陽奇観	
1722. 9.24	享保 7. 8. 14	暴風雨(高潮)	茨城・東京・神奈川・山梨・岐阜・静岡(死者100)・愛知(死者400)・三重・京都・兵庫・奈良・和歌山(死者多し) (伊勢湾に高潮, 熱田付近の被害ひどく, この付近のみで溺死者250人余, 高潮は平均砂位 2mに達す)	月堂見聞集, 塩尻談海	
1723. 9. 7 ~9	享保 8. 8. 8 ~10	大洪水	北海道・青森・岩手・宮城・秋田・山形・福島・茨城・栃木・群馬・埼玉・千葉(死者400余)・東京・神奈川・新潟・石川・福井・長野	月堂見聞集, 塩尻談海	
1725 夏	享保10.	旱魃	青森・岩手・山形・石川・滋賀・京都・兵庫・和歌山・鳥取・鳥取・岡山・山口・徳島・香川・高知・福岡・佐賀・大分	月堂見聞集, 蜂須賀家記 八戸藩史稿	
1728. 10. 4	享保14. 9. 2	暴風雨	茨城・栃木・埼玉・東京(死者7,988)・神奈川(小田原・小石川・下谷・浅草・本所のはより水溢れる事, 地上丈余に及ぶ(徳川実紀))	武江年表, 月堂見聞集 御營日記, 江戸洪水記	

西暦年月日	年号(旧月日)	災害種別	被害地域(府県別) 被害概要	おもな出典	社会・政治状態
1732 年月日	享保 17.	凶作 飢饉	岩手・宮城・秋田・山形・福島・茨城・富山・石川・福井・長野・岐阜・静岡(餓死多し)・兵庫(餓死多し)・奈良(餓死多し)和歌山(餓死多し)・島根(餓死169,900)・広島(餓死976)・徳島・愛媛(餓死3,489)山口(餓死177,500)・佐賀(餓死1万以上)福岡(餓死多し)・熊本(餓死6,125)・大分・宮崎・鹿児島(凶作で全国96万人の死者を出したといわれる)	御年表, 護国公年譜	(1732)享保の大飢饉 (1733)米価騰貴, 江戸打ちこわし
1742. 8. 28 ~9. 1	寛保 2. 7. 28 ~8. 1	暴風雨 (洪水)	福島・茨城(死者多し)・栃木・群馬・埼玉・東京・神奈川・新潟・富山・石川・福井・山梨(死者数万人)長野(死1,220)・滋賀・京都・奈良(江戸三大洪水の一つ, 利根川と阿田川など大洪水で破壊, 江東へ流れ下り高潮も加わって死者6,000)	続日本王代一覽, 十三朝紀聞 続むさしあふみ, 青腰年譜考	
1744. 9. 14 ~17	延享 1. 8. 8 ~11	暴風雨	北海道(死者30)・兵庫・鳥取・広島(死者142)山口(死者39)・香川・愛媛・佐賀・熊本・大分	日向国史, 因府年表	
1755. 9. 29	宝暦 5. 8. 24	暴風雨	鳥取・島根・岡山・広島(死者11)山口(死者53)香川・愛媛・高知・福岡(死者4)・熊本・大分	続史墨抄, 有吉記録 因府年表	
1755夏~秋	宝暦 5.	凶作 飢饉	北海道・青森・岩手(餓死49,594)・宮城(死者4,000)秋田(餓死者)・山形・福島・石川・福井・鳥取・島根・山口		
1757. 5中 ~6中	宝暦 7. 4中 ~5中	長 洪水	岩手・宮城・秋田・山形・福島・栃木・埼玉・千葉・東京・神奈川・福井・長野・岐阜・静岡・愛知(最上川驚異の大洪水, 米沢地方8.1m増水し死者37)	自然未開記, 続史墨抄 武江年表	
1770 夏	明和 7.	旱 魃	青森・宮城・山形・福島・茨城・埼玉・千葉・東京・神奈川・石川・福井・長野・岐阜・愛知・三重・滋賀・京都・大阪・兵庫・奈良・和歌山・岡山・広島・山口・徳島・愛媛・香川・高知・福岡・熊本・宮崎	策のすさび, さたなし草 後見草, 続史墨抄	
1771 夏	明和 8.	旱 魃	岩手・宮城・山形・福島・茨城・栃木・群馬・千葉・東京・石川・福井・長野・三重・滋賀・京都・兵庫・和歌山・岡山・広島・山口・香川・愛媛・福岡・佐賀・熊本 (この夏に旱すること去年のごとく、五穀みのらず[半日開基])	続皇年代私記, 三貨園書 平日閑話	(1772)江戸日黒行人坂の大火 死者400
1774. 7. 21	安永 3. 6. 23	暴風雨	山形・千葉・東京・神奈川・新潟・滋賀・京都・大阪(死者1,200)・兵庫・奈良・和歌山・岡山・山口・徳島・宮崎 (大津川口詰るところの船覆り溺死するもの1,200人[続日本王代一覽])	続史墨抄, 徳川実紀 大徳公御年表, 武江年表	

1783. 7. 16 ~17	天明 3. 6. 17 ~18	洪 水	宮城・山形・福島・茨城・栃木・群馬・千葉・東京・神奈川・石川・長野・岐阜・静岡・愛知・滋賀・京都・兵庫・岡山(死者多し)・広島(死者多し)	農諭, 天明年度凶歳日記	
1783. 8. 6 ~7	天明 3. 7. 2 ~3	洪 水	新潟・富山・石川(死者500余)・福井	一言一語, 政碑記	
天明の飢饉 1783 秋	(天明3~7年) 天明 3.	飢 饉	北海道(餓死1,000余)・青森(餓死多)・岩手(餓死40,850)・宮城(死者300)・秋田・山形・福島・茨城・栃木・群馬・埼玉・新潟・石川・福井・長野・岐阜・兵庫・奈良・和歌山・鳥取・島根・徳島・福岡・佐賀・長崎・熊本・大分		(1783)浅間山大爆發 (死者2万)
1784	天明 4.	飢 饉	北海道(餓死多し)・岩手・宮城(餓死7万余)・秋田・山形・福島・埼玉・千葉・新潟・石川・福井・長野・岐阜・静岡・兵庫・和歌山・鳥取(死者多し)・島根(餓死200)・広島・山口・徳島・福岡・佐賀・宮崎		
1785	天明 5.	旱 魃	宮城・茨城・埼玉・千葉・東京・新潟・石川・長野・岐阜・三重・京都・兵庫・奈良・岡山・広島・山口・香川・愛媛・福岡・佐賀・熊本・宮崎	泰平年表, 武江年表 有吉記録	
1786. 8. 5 ~10	天明 6. 7. 12 ~15	大 洪水	宮城・福島(死者数十)・茨城・群馬・埼玉・千葉・東京・神奈川・新潟・山梨・長野・岐阜・三重(関東一円大洪水, 利根川, 荒川, 多摩川, 鶴見川などのほか中小河川皆洪水, 江戸三大洪水の一つ死者30,000余)	天明紀聞, 武江年表 魂園小説, 甲子夜話	
1786 夏	天明 6.	不 作	青森・岩手・宮城・秋田・山形・茨城・石川・福井・長野・岐阜・奈良・鳥取・島根・愛媛・福岡・佐賀・熊本・大分・鹿児島		

*天明飢饉の大要(日本凶荒史考より)

天明2年, この歳春夏陰冷霖雨し, 諸國4分の歳収を奪え, 西國特に南部, 九州等大に凶荒す, 東北諸國また凶作たりしも米価高を好機とし余分あるものは西國に出せり, 然るに翌3年春より陰湿多雨霪霪至らず, 6月寒冷を催し, 京畿に於てなお冬服を着するの與例あり, また大いに風水して諸川田圃農穀を傷む, 7月浅間山有史以来の大噴火あり, 灰砂と泥流は信上武3州の田畑を害し, 里番を漂溺す, 諸國の陰冷この後止むことなく, 遂に旱寒の襲うところなりて諸國大に凶荒す。わけても関東, 東北は春米北東の寒冷風に終始し米倉有大凶作となりしも余儲なきを以て, 流民道路に堵をなし, 饑饉大に凶荒す。わけても関東, 東北は春米北東の寒冷風に終始し米倉有大凶作となりしも余儲なきを以て, 流民道路に堵をなし, 饑饉大に凶荒す。わけても関東, 東北は春米北東の寒冷風に終始し米倉有大凶作となりしも余儲なきを以て, 流民道路に堵をなし, 饑饉大に凶荒す。7年春亦陰霖し, 夏更に旱すことを知らず, 故に米價非常の昂騰, 諸民大いに飢す, 幕府令して買占等を禁じ舊給の門閉をはかるも効果なく, 遂に飢民蜂起, 打ちわしの暴動を起すに至れり。天明2年より7年に亘る間, 北は北海道より南琉球に至るまで諸國賑に飢荒し, 我が國土殆ど完膚なかりしといふ。

西暦年月日	年号(旧月日)	災害種別	被害地域(府県別)被害概要	おもな出典	社会・政治状態
1836 秋	天保 7.	凶飢	青森・岩手・宮城・秋田・山形・福島・茨城・栃木・群馬(餓死有り)・埼玉・神奈川・新潟・富山(餓死多し)・福井・長野・静岡・岐阜・和歌山・鳥取・島根・山口・徳島・福岡・佐賀・熊本・宮崎		
1837 春	天保 8.	飢	宮城・秋田・福島・富山(餓死多し)・静岡・島根・山口・熊本・大分・宮崎		(1837)大塩平八郎の乱(大阪)
1837春~夏	天保 8.	疫病	福島(病死有り)・岐阜(病死多し)・和歌山・鳥取(病死2万)・島根		(1841)天保の改革始まる(水野忠邦)
1846. 8. 中旬	弘化 3. 6.20 ~30	大洪水	福島・茨城・栃木・群馬・埼玉・東京(江戸三大洪水の一つで丙午の大水という。浅草1.35m浸水)	武江年表 日本震災凶騒放	(1847)信濃・越後大地震(死12,000, 破壊34,000)
1850.10.7.	嘉永 3. 9. 2 ~3	暴風雨	青森・群馬・石川(死者13)・福井・愛知・三重・滋賀・京都・兵庫・和歌山・鳥取・岡山・香川・愛媛(京都、鶴川大洪水)	嘉永記録, 熊野史 今日抄	
1853夏~秋	嘉永 6.	旱魃	宮城・秋田・山形・福島・茨城・東京・神奈川・新潟・石川・福井・岐阜・愛知・三重・滋賀・京都・大阪・兵庫・奈良・和歌山・鳥取・岡山・広島・山口・徳島・香川・愛媛・福岡・長崎	武江年表, 大阪地震記 東藩史稿	(1853)ペリー, 浦賀に入港 (1855)江戸, 安政大地震(死者6,757, 破壊50,000)
1856. 9.23	安政 3. 8.25	暴風雨	宮城・山形・福島・群馬・千葉・東京(死者多し)・神奈川・長野・静岡・福岡(東京湾高潮, 気象潮は2.5~3.2mに達す。この災害を機会に本格的な災害史が作られた。(安政見聞誌など)	武江年表, 嘉永・明治年間録 江都大風潮雑記略	(1858)日米通商条約調印 (1858)安政の大獄始まる
1859. 8.22 ~24	安政 6. 7.24 ~26	暴風雨	岩手・宮城・山形・福島・栃木・群馬(死者60)・埼玉(死者28)・千葉・東京・神奈川・石川・長野(利根川氾濫・尾瀬大洪水)	嘉永明治年間録, 今日抄	
1860. 6.28 ~30	万延 1. 5.10 ~12	暴風雨	岩手・山形・福島・栃木・群馬・東京・神奈川・長野・岐阜・静岡・愛知・三重・滋賀・徳島(伊勢湾高潮・木曾三川大洪水・天竜川大洪水)	青葱紀聞, 今日抄	(1860)桜田門外の変 (1864)蛤御門の変, 長州征伐 四国連合下関砲撃
1866. 9.14 ~16	慶応 2. 8. 6 ~8	暴風雨	宮城・山形・茨城・栃木・群馬・東京・神奈川・石川・福井・山梨・長野・岐阜(死者有り)・滋賀・京都(死者100以上)・大阪・兵庫・奈良(死者多し)・和歌山・徳島(死者63)・愛媛・香川(死者有り)・高知	品川彌二郎日記 中山忠能日記 在京在阪中日記	(1867)大政奉還 明治天皇即位
1868. 6.28 ~7.19	明治 1. 5. 9 ~30	大洪水	岩手・新潟・山梨・長野・岐阜(死者有り)・愛知(死者941)・京都・大阪・兵庫	死部新聞 明治史要	

1869. 6 ~9	明治 2. 5 ~8	凶作	北海道・青森・岩手・宮城・秋田・山形・福島・茨城・石川・福井・長野・島根・愛媛・福岡・佐賀(この年の大凶作は天明・天保とともに近世の三大凶作群という)	明治初年農民騒擾記	(1868)江戸を東京と改称
1869 秋	明治 2.	飢	宮城・山形・石川・福井・広島・山口・愛媛・宮崎(春より気候不順で穀類多欠, 14年。このため東北・關東地方饑饉となる。米価大暴落。各地に飢饉一帯や米騒動が起る。輸入米の買上7,149万。8月25日因作物価格暴落のため, 明治天皇即位の節を下す(日本国史文庫)		
1870.10.12	明治 3. 9.18	暴風雨	宮城・福島・茨城・栃木・群馬・千葉・東京・神奈川・岐阜・愛知(死者有)・三重(死者532)・滋賀・京都・大阪・兵庫・奈良・和歌山(死者137)・香川・大坂府要(紀の川大洪水)	紀州製菓年表 武江年表 大阪府要	
1871. 7. 4 ~5	明治 4. 5.17 ~18	暴風雨	群馬・石川・福井・京都・大阪(死者100)・兵庫(死者600)・奈良・和歌山(死者29)・岡山(死者22)・広島・香川・愛媛(死者多し)(兵庫神戸辺津波に及び日本の風浪600隻。外國船5隻一時に毀損或は沈没せり。海難の死人凡600人【明治編年史】)	新聞集成明治編年史	(1871)鹿島嶺 (1872)新橋・横浜に鉄道開通 (1872)太陽暦を採用(12月3日が6年元旦)
1873. 6 ~8	明治 6.	旱魃	栃木・千葉・石川・福井・岐阜・兵庫・島根・香川・愛媛・福岡・佐賀・熊本	新聞集成明治編年史	(1872)函館測候所創立
1876. 7 ~8	明治 9.	旱魃	宮城・秋田・山形・茨城・栃木・群馬・埼玉・福井・兵庫・鳥取・島根・山口・福岡	同上	(1875)中央気象台創立
1883. 6 ~8	明治16.	旱魃	北海道・宮城・山形・茨城・栃木・新潟・石川・福井・愛知・三重・滋賀・京都・兵庫・奈良・和歌山・鳥取・島根・広島・山口・徳島・香川・愛媛・福岡・佐賀・熊本	同上	(1877)西南の役起こる
1883. 8.17	明治16.	暴風雨	岐阜・佐賀・長崎・熊本・大分・宮崎・鹿児島(死者66)	官報	(1883)天気図の始まり
1884. 8.25	明治17.	暴風雨	石川(死者有)・福井(死者有)・岐阜・京都・兵庫・和歌山・島根・山口・岡山(死者655)・広島(死者有り)・徳島・香川・愛媛(死者53)・福岡・佐賀(死者16)・大分・宮崎(天草藩一掃防藩→中国地方→佐渡→本州北部)(全閣合計死者1,718, 負傷261, 家屋崩壊63,075軒)	日本災異誌 台風調査報告	(1884)天気予報始まる
1884. 8.	明治17.	凶作	北海道・青森・岩手・宮城・山形・茨城・群馬・石川・徳島		